

YU-INFORMATION

No.116

山口大学広報誌

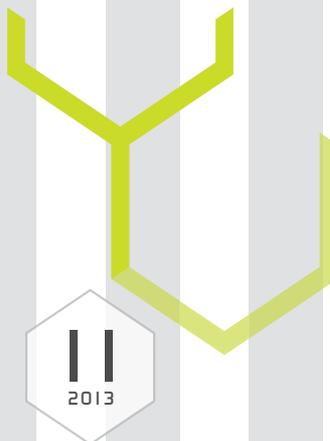
11  
2013

特集

# 人を知る、人を育てる。

「ちゃぶ台を囲んで先生を目指そう」(教育学部)

「手術支援ロボット ダ・ヴィンチへの期待」(医学部)



## cover story

[今月の表紙]

知の広場として山口大学の中心に位置し、その知識の基礎を支える存在になろうと進化している総合図書館がリニューアルされました。

古代アレクサンドリア図書館のような知識を収集する機能だけでなく、それを追及する人々に人間として考える機会を提供してくれます。

今年、大学生になり彼女の「知の探究」は始まりました。その先に広がる世界を彼女はどのように進んでいくのでしょうか。

## contents

### 03

今月の特集 | #1 | 教育学部

## ちゃぶ台を囲んで先生を目指そう。

山口大学教育学部

附属教育実践総合センター 霜川 正幸 准教授

### 05

今月の特集 | #2 | 医学部

## 手術支援ロボット 「ダ・ヴィンチ」への期待

山口大学大学院医学系研究科泌尿器科学分野 松山 豪泰 教授

07 総合図書館リニューアル部分開館!

08 おもしろプロジェクト  
地域貢献への取組み

09 What's New? YU-PRSS

10 EVENT SCHEDULE  
Next Issue

【 今月の特集 】

# 人を知る、 人を育てる。

*Study humans, educate humans.*

新制大学として60余年が経過し、国立大学から国立大学法人へ組織も変わった山口大学は今、独自の進化を求められている。そのうねりの中で、綿々と成果としての「人」を送り出し続けてきたのが「教育学部」と「医学部」である。今回は「ヒト」として生まれ、「人間」になっていく特異な生態系を維持していく根源に関わっている、両学部の新しい取組みをご紹介します。



特集 #2 医学部  
School of Medicine

特集 #1 教育学部  
Faculty of Education

# ちやぶ台を囲んで 先生を目指そう。

円卓を囲むように、  
同じ目線に立って議論し、

実践し、解決する。

次代の教育を担う

教員を養成する、

山大独自の取り組みを

紹介します。



## Profile

山口大学教育学部  
附属教育実践総合センター 准教授

**霜川 正幸** Shimokawa Masayuki

1980年 中央大学文学部史学科卒業

専門分野: 教育実践、教師教育

山口県・山口大学教育学部間で結ばれた「教育連携推進協定」に基づく「交流人事教員」の第1号として着任。教員養成・教員研修支援に関する研修指導業務や学校教育全般、学校・家庭・地域社会の連携、信頼される学校と学校改革、社会教育・家庭教育や人権教育等に関する講演、指導助言等の学外活動を幅広く展開中。

大学と教育現場、教育行政をつなぎ、教員養成の課題に対応する、山大独自の「ちやぶ台プログラム」について、教育学部附属教育実践総合センターの霜川正幸准教授に語っていただきました。

## 教育課題解決に立ち向かう 新たな教員養成の在り方

近年、社会構造や地域社会の状況が大きく変化し、人間関係の希薄化や規範意識の低下などが社会問題になっています。そうした変化は、いじめや不登校など、学校現場にも深刻な影響を与えています。一方で、ベテラン教員が大量退職期を迎えるため、若手教員の養成が急務とされています。その上、多様な教育ニーズへ対応するため、さらに幅広い指導力や専門職としての高い資質能力が求められています。しかし、従来の大学教育では、こうした現場が抱えるさまざまな課題に対応しきれないという不安がありました。

こうした背景から、平成17年にスタートしたのが「ちやぶ台プログラム(ちやぶ台方式による協働型教職研修計画)」です。このプログラムは、教職を志望する学生、大学教員、現職教員、教育機関関係者、保護者などの教育関係者が、それぞれの立場から、あるいは立場をこえて協働し、さまざまな教職体験や活動を行うことによって、現場への理解や実践的な指導力、課題解決能力の育成を目指すものです。年間のべ2500人の学生や院生が参加しています。

かつて、ちやぶ台は、豊かな学びの場所でした。家族全員が上座下座のない円卓を囲みながら、語り、励まし合いながら、人としての知恵や生き方を学んできました。それと同様に、「教える者と教えられる者」という一方的な関係ではなく、互いに学び合い、高め合う関係の中で、教員としての素性を養ってほしい。「ちやぶ台」というネーミングには、そんな願いが込められています。



教育学部に開設した「ちゃぶ台ルーム」には、直径約90cmのちゃぶ台を設置しています。互いの表情が見えて、本音を語り合える。数人でコミュニケーションをとるには、ちょうどいい距離感だと思います。もう一つ、学校のミニ職員室を意識させ、チーム力を高めたいという狙いもあります。それぞれの役割を認識し、チームとしてより良い教育活動に取り組むという、集団としての専門性を高めていくことも重要だと考えています。そのほか、インターネットを用いた電子版ちゃぶ台「e-ちゃぶ」も設置し、時間的・空間的制約を超えた幅広い意見交換の場として活用しています。

## 体験・活動を振り返り 教育者としての素地を築く

現在、ちゃぶ台プログラムは15あり、大きく分けて3つに分類されます。

まず一つ目は、学生が幼稚園や小・中・高等学校を訪問し、諸活動に参加するプログラムです。授業や生活、遊びなどでの支援や交流を行うだけでなく、保護者や地域住民との交流にも参加するなど、幅広い活動を展開しています。

二つ目は、学生が地域を活用して子どもや教育関係者などと交流し、学び合うプログラムです。「ちゃぶ台林間学校」では、学生自ら、小学生を対象とした教育キャンプの企画運営・体験・指導などを行っています。

三つ目は、学生が現職教員と交流するプログラムです。代表的なものに「ちゃぶ台次世代コーホート」があります。これは、本学と山口県・山口市教育委員会の連携・協働のもと、教職志望の学生と若手教員が、日々の体験の共有などを行うことによって、教員としての資質を高め、課題

解決を図ろうとするものです。当初は、学生の実践的指導力の養成を目指す目的でスタートしましたが、次第に現職教員の資質向上も踏まえた内容に進化してきました。若手の現職教員からは、「原点に戻って自分を見つめ直せる」「教師としてのモチベーションが上がった」と大変好評で、参加者は年々増えています。一方、プログラムに参加した学生は「子どもの扱いを知っている。気持ちをよく理解している」「人間関係性に優れている」などと、現場からも高い評価を得ています。

ちゃぶ台プログラムは、あくまでも参加者の自主性・主体性を基本とした、正課外のプログラムです。学生は、授業の空き時間や余暇を活用して、自らの課題認識や目的意識をもち、意欲的に教職研修に取り組んでいます。こうした学生たちが教育学部全体のモチベーションを上げていってくれるものと期待しています。



## 変化する社会に対応できる しなやかな人材育成を目指して

体験するだけで実践力が身につくわけではありません。重要なのは、自分から課題を求め、考え、次に生かすといった思考回路を持ち、体験の向こう側にある物事の本質を捉えることです。経験や失敗を仲間と共有し、そこから大切なことは何かを議論し、考え、振り返る。これを繰り返すことで、教員としての素地や心の物差しができていくものと考えています。

知識には賞味期限があります。技術もいずれさびてきます。今後は、変化する社会の中で情報をキャッチし、学び続けながら、うまく対応していく力、すなわち生きる力が必要です。私は、本プログラムを通じて、自ら局面を切り拓いていく力、与えられた仕事にプラスαの提案ができる力、しなやかな臨機力を養えるものと信じています。

取り組みを始めたことによって、本学の教職課程が、実践的な指導力の向上を図る方向にシフトしてきています。授業の中にプログラムを取り込んでいくものもあります。大学の教員も教育現場とつながろうという意識が非常に高まっています。これはいい意味での変化だと捉えています。

以前は、大学と教育現場、教育機関が協働するという意識は希薄でした。しかし、本プログラムを通じて、学校はもちろん、県や市の教育委員会と大学との距離感はかなり縮まりました。これによって教員の養成・採用・研修の一本化に向けた機運が醸成できたと考えています。

今後は、それぞれのプログラムの学びをつなぎ、学びの幅と質をさらに高めることを視野に入れています。また、学校という枠にとらわれない広い視点も必要です。さまざまな人とつながりながら、学校から地域、家庭へと、教職の学びのフィールドを広げていきたいと考えています。

夏は瑞々しくグングン伸びていく、冬は雪の重荷に耐えながらもしなやかに跳ね返す…そんな若竹のような…これは、私個人が思い描く理想の教師像です。本プログラムの参加者は、教職に情熱と使命感を持って積極的・意欲的に取り組んでいます。彼らの真摯な思いを受け止め、背中を押すとともに、これからも彼らのニーズに基づいた学びの場や機会の提供に努めていきたいと思っています。

## Student's Voice

[ ちゃぶ台プログラム参加者の声 ]

Voice  
#1



山口大学教育学部  
保健体育選修4年

高原 杏奈 さん

### たくさんの人々との交流を通じて 教育者としての軸が明確に

このプログラムに参加して、子どもを多角的な視点で理解し、教員という職業をいろいろな窓を通して理解することができました。たくさんの人々と交流しながら学べるので、そこが楽しいところでもあり、大変なところでもあります。だからこそ、人として、教育者としてどう接するべきか、自分の軸を持つことが大切だと痛感しました。

Voice  
#2



神石高原町立三和小学校  
教諭

飯干 新 さん

### ちゃぶ台プログラムは、誰もが 本音で話せる学びの場です。

大学時代にちゃぶ台プログラムに参加して以来、教員になった現在もこのプログラムに継続して参加しています。何でも話し合える同僚のような中で、さまざまな刺激を頂けるからです。プログラムで得た「人や問いとのお会い」は大きな収穫。教員は学ぶ人とかかわる職業だから、人とのコミュニケーションを大切に、常に問いをもって生きていきたいと思っています。

ちゃぶ台プログラムの詳細はここでCHECK! >>

<http://nagomi.e-chab.edu.yamaguchi-u.ac.jp:8080/chabudai/>



# 「ダ・ヴィンチ」への期待 手術支援ロボット

外科領域の手術に大きな変革をもたらす最新鋭ロボットを用いた次世代医療の姿、そこから見えてくる大学病院の使命に迫ります。

## 手術支援ロボット「ダ・ヴィンチ」とは

1990年代、アメリカのインテュイティブ・サージカル社が開発した手術支援ロボット。3本のアームとカメラが装着された「パシエントカート」、医師が操作を行う「サージョンコンソール」、3Dモニターが設置された「ビジョンカート」と呼ばれる3つの独立したパーツで構成されている。医師は3Dモニターで患部を見ながらロボットアームを遠隔操作する。手の動きに連動してアームの先端に取り付けた器具が動くしくみになっており、ロボットを自在に操作して切除や縫合を行う。現在、欧米を中心に2000台近くが稼働。日本では大学病院を中心に約100台が導入されている。費用は1台3億2200万円。



サージョンコンソール    パシエントカート    ビジョンカート

## 最先端手術支援ロボットが もたらすイノベーション

我々の領域である前立腺の全摘手術は、前立腺がんの根治が期待できる最も有効な治療法です。この手術をより正確に行い、患者さんへの負担も軽減する方法として注目されているのが、アメリカで開発された手術支援ロボット「ダ・ヴィンチ」を使った手術です。

既にアメリカでは、前立腺の全摘手術の約8割がダ・ヴィンチを導入した手術に移行しており、その有用性が認められています。日本では、昨年4月から、前立腺の全摘手術の保険適用が認められたのをきっかけに、導入の動きが広がっています。こうした動きを受けて、本学医学部附属病院では、昨年8月、本格的な導入に踏み切りました。

## ダ・ヴィンチ導入による 患者、医師へのメリットとは

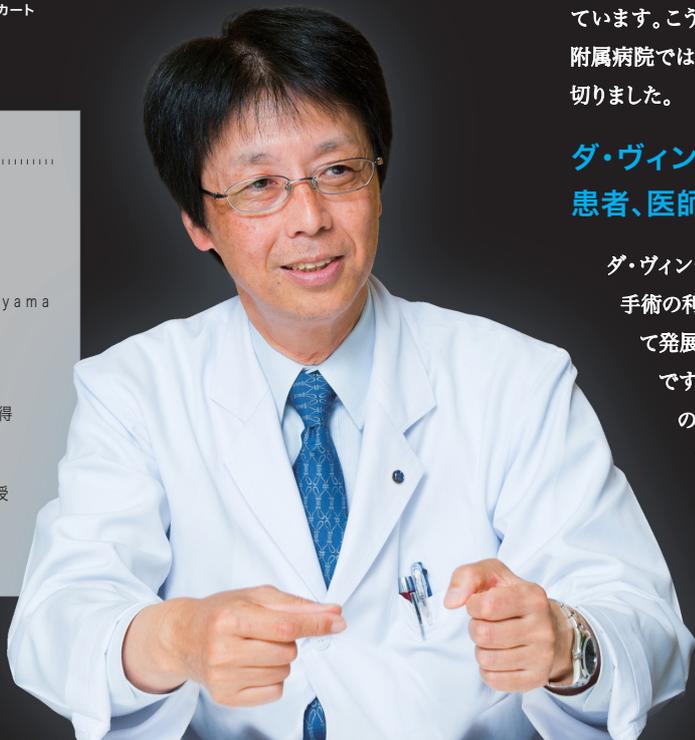
ダ・ヴィンチは、従来の開腹手術や腹腔鏡手術の利点に、ロボット機能を組み合わせで発展させた、最先端の医療用ロボットです。手術部と操作部、モニター画面の3つの独立したパーツで構成されており、手術部には内視鏡カメラと3本のロボットアームが装着されています。執刀医が3D

## Profile

山口大学大学院医学系研究科  
泌尿器科学分野 教授

**松山 豪泰** Hideyasu Matsuyama

1981年 山口大学医学部卒業  
1987年 山口大学大学院医学研究科博士課程修了  
1992年 スウェーデン王立カロリンスカ研究所留学、PhD取得  
1996年 山口赤十字病院泌尿器科 部長  
2001年 山口大学医学部泌尿器科 助教授  
2008年 山口大学大学院医学系研究科 泌尿器科学分野 教授  
研究内容: 尿路性器悪性腫瘍の細胞遺伝学、  
遺伝子診断、性器脱手術における排尿機能、QOL評価





← [写真1] 術野の3D画像に加え、超音波エコーや心電図などの外部入力画像を最大2つまでモニターに追加表示することができる。TilePro™ マルチ入力ディスプレイ。[写真2] アーム先端の鉗子の操作時の様子。[写真3] モニターに映し出された操作時の様子。[写真4] サージョンコンソールで、拡大された高解像度3次元立体画像を見ながらロボットアームを操っている医師。



モニターを見ながら操作すると、微細な手の動きが忠実にロボットアームに反映され、患部の切除や縫合などを行うことができます。同ロボットを使用する手術には、さまざまなメリットがあります。一つ目は、患者さんへの肉体的なメリットです。従来の開腹手術では下腹部を20～25cm切開することが必要でしたが、ロボット支援手術の場合は、わずか1cm程度の穴を6カ所開けるだけで済みます。そのため、術後の痛みが少なく、回復が早いため、早期退院が見込まれます。手術中の出血量も非常に少なく、患者さんの体への負担を大幅に軽減することができます。さらに、大きなメリットは、男性機能を保持できることです。微細な神経や血管を傷つけるリスクが低減できるため、勃起神経の温存においても極めて効果的です。

二つ目は、最大15倍に拡大した鮮明な3D画像を見ながら操作できることです。これによって、より安全で精度の高い手術を行うことができるようになりました。手術後に顕微鏡で詳しく観察しなければ見つけられなかったような微細ながんも発見できるようになり、取り残しのリスクも大幅に低減されました。術者はまるで患者さんの体の中に入り込んでいるような感覚なんです。アームには、広範囲に動く関節がついているため、人間の手以上の複雑で繊細な動きも可能になりました。

さらに、執刀医の肉体的な負担の軽減にも役立っています。従来の開腹手術では、立ったままの状態が長時間続き、体力的な負担がありました。同ロボットを用いた手術の場合、術者はコンソールと呼ばれる操作台に座ったままで手術を行います。さらに、長時間の緊張からくる手の震えも手ぶれ補正機能で抑えられます。こうした術者へのストレスの軽減は、より安全で正確な手術につながるため、結果的に患者さんにとってのメリットも大きくなります。

本学医学部附属病院では、70弱と症例数がまだ多くはありませんが、確実な成果を上げています。前立腺全摘手術の場合、開腹手術に

比べて、手術時間は平均約50分の短縮、出血量は1355mlの減少(開腹手術の約20%)、入院期間は約3日間の短縮が実証されています。

## 若手医療人のスキルアップ 教育面でも大きく貢献

ロボット支援手術を行うためには、術者および助手は専門的なトレーニングコースを受け、認定資格を取得しなければなりません。さらに、本学医学部附属病院では、独自のガイドラインに基づいた試験も設けています。その中の一つに、ミカンの皮むきがあります。実は、ダ・ヴィンチはものすごく力が強いんです。それに、ロボットアームからもたらされる触覚がないため、どのくらいの強さで押したり、引っ張ったりしているのかは分かりません。ですから、慎重に扱わないと、ミカンに穴があいてしまいます。表皮をむき、小袋にわけて、最後には薄皮もむいて、缶詰のミカンと同じ状態にする。こうした繊細なテクニックを身につけなければ、患者さんの体を扱うことはできません。

ロボットと聞くと、鉄腕アトムのような意志を持ったロボットが動く場面を想像する方もいらっしゃるかもしれませんが、そうではありません。どんな手段でどのような手術を行うのかを判断するのはあくまでも医師です。ダ・ヴィンチは医師の命令を忠実に反映する道具に他なりません。そこで必要とされてくるのが、解剖学な観点です。これまで、本で学んだ解剖学の知識を生きたものとして身に付けるためには、地道に手術経験を積み、技術と感覚を養うことが必要でした。たとえば、前立腺の開腹手術の場合だと、一人前の手術が行えるようになるまでには、250例の手術歴が必要とされています。一方、ロボットを用いた手術の場合は、同じ視野をスタッフ全員で共有できるため、ベテラン医師が画像を見ながら若手医師に指導することもできます。また、ベテラン医師が行った手術の画像を共有することもできるので、若手医師の経験不足を

補うことが可能です。こうしたことから、技術や判断能力を比較的スピーディーに養うことができるのではないかと考えています。

現在、泌尿器科では、4人が認定資格を保有しています。最先端の技術を習得できるという理由から、若手医師のモチベーションが非常に上がりました。学生の興味・関心も非常に高いですね。臨床実習の中でダ・ヴィンチのシミュレーターを使ったトレーニングが受けられるのですが、ゲームで育った世代だからでしょうか、驚くほど習得が早い学生もいます。ダ・ヴィンチの導入は、最先端医療の提供だけでなく、優秀な若手医師の育成および学生教育にも大いに役立つものと期待しています。

## 地域医療の未来をひらく 新たな可能性に期待

現在、ダ・ヴィンチを使用した手術に対して保険適応が認められているのは前立腺の全摘手術のみですが、先進医療や公的保険などの対象が広がれば、さまざまな手術で導入されるはず。山医大医学部全体としては、泌尿器科に続き、消化器外科や胸部外科での使用も計画しています。

近い将来、手術支援ロボットの導入が当たり前になる時代がきます。ロボットの性能も高まり、触覚を感知できるような第二、第三世代の進化系ロボットも登場してくるはず。そうならば、ロボットを扱える医師の育成が急務となってきます。しかし、ライセンス取得には2名で最低100万円の費用がかかります。安全性も確保しながら慎重に進めていかなければいけませんから、一足飛びではなく、ステップ・バイ・ステップで優秀な人材を輩出していきたいと考えています。今後も、ロボット支援手術を通して、地域の皆様に最先端の医療を提供すると同時に、将来を担う優秀な医療人の育成を行い、高等教育機関である大学病院としての使命を果たしたいと思っています。

自由に書き込みできる壁一面のホワイトボードを設置し、机やイスの移動も自由自在のアカデミック・フォレスト



**GOOD!**  
 会話もOK! 新しい学習空間  
 アカデミック・フォレスト

一般的な図書館は、館内では静かにしていなければならないイメージがありますが、新しい図書館の1号館1Fでは、しゃべっても構いません。新たに設けられたアカデミック・フォレストは、自由に書き込みができる壁一面のホワイトボードと、自由に並べ替えることのできる机と椅子が設置されており、学生のディスカッションの場として利用できます。壁のホワイトボードは、スクリーンとしての役割も果たすので、PCやプロジェクターを持ち込んでプレゼンテーションの練習をすることも可能です。



**GOOD!**  
 留学生、日本人学生、一般の方の交流を図る  
 文化交流スペース

文化交流スペースには、留学生、日本人学生、一般の方に資料を介して交流を図っていただきたいという目的のもとに、留学生用の書籍、日本人学生のための留学用の書籍や語学学習書、一般の方にも楽しんでいただけるような地域関連書籍が同じスペースに置かれています。

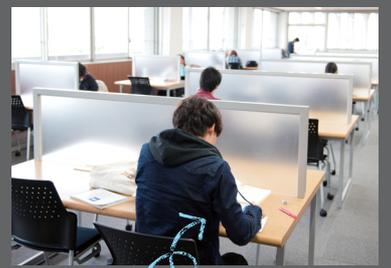
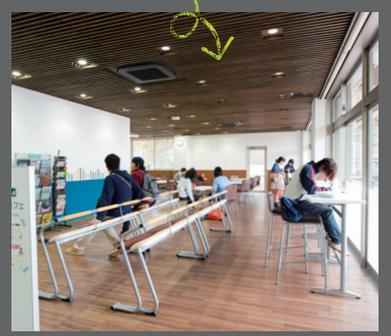
# 総合図書館 リニューアル 部分開館!

平成24年度に着工した総合図書館の全面改修工事は順調に進み、10月1日から部分開館しました。今回の改修により書庫棟の増築による蔵書スペースの確保、グループ学習室の増設、さらに学習のための共有スペースである“アカデミック・フォレスト”や“りぶカフェ”などが新設され、より使いやすく、長時間でも快適に利用できるようになりました。学習の場としての役割に加え、集い、交流する“知の広場”を目指す新しい総合図書館の中から、すでに利用が開始された施設をピックアップしてご紹介します。

総合図書館の詳細はここでCHECK! >>  
<http://www.lib.yamaguchi-u.ac.jp/>

**GOOD!**  
 長時間の利用者にうれしい  
 広い休憩スペース  
 りぶカフェ

飲食可能なスペースです。自動販売機や開放感のあるウッドデッキもあり、休憩・交流の場として利用できます。2014年1月には、「図書館Café」として、学生によるカフェ運営がスタートする予定です。



**GOOD!**  
 黙々と勉強したいときはここ!  
 グループ学習室も増設  
 学習スペース

学生がより学習に集中できるよう、仕切り付きの机が設置されました。ノートパソコンでのインターネット利用が可能です。また、長時間座っていても疲れないう、椅子も改善されました。グループで学習したい学生のためには、6つのグループ学習室が設けられています。



# おもしろプロジェクト

山大オリジナルの学生の自主的活動への資金支援制度、「おもしろプロジェクト」も今年で17年目。これまでに採択されたものから現在進行中のプロジェクト、その他の活動内容をご紹介します。



## 図書館Café

—山口大学に新しい憩いの場を!—

今年度採択プロジェクトの一つである「図書館Café」は、総合図書館内にできた“りぶカフェ”での学生主体によるカフェ運営を目指しています。開店するにあたり、メニュー、単価、スタッフ、経理等、解決しなければならない問題はあり、ニーズの調査、課題の洗い出しをしています。2014年1月8日から2月27日までのプレ・オープンにて課題をより明確にして、新年度のオープンを目指します。現在は、プレ・オープン期間のメニューを考案していて、コーヒー、カプチーノ、カフェオレなどの本格コーヒー、紅茶、ソフトドリンク、又フードメニューとしてケーキの提供も考えています。これまでの活動は、経営計画、保健所提出書類の準備、施行業者との打ち合わせ、FaceBookのページ作り、食器類などの選定などです。関係者の方からいろいろなアドバイスをいただいております。メンバー達は多くの方から支えられているプロジェクトだと実感しています。



プロジェクトメンバーによる打ち合わせの様子



オープン後は、ウッドデッキでも本格コーヒーを楽しめる

おもしろプロジェクトの詳細はここでCHECK! >> <http://ssct.oue.yamaguchi-u.ac.jp/omoprohp/index.html>

## 地域 貢献への 取り組み

地域に開かれた大学としての取り組み

3

## 学生と地域の人を繋ぐお祭り 第1回結人祭開催

—山口市中市商店街組合と2つの学生団体が企画協力したイベントを開催—

きゅっとさい

山口大学では、大学の有する人的・物的資源を活用して、地域社会との連携を推進し、地域活性化、ボランティア等、さまざまな活動に取り組んでいます。



9月14日(土)、山口市中心商店街において、第1回結人祭が開催されました。結人祭は、文字どおり、学生と地域の方々、人と人が繋がることを目指したお祭です。若者を商店街に呼び戻したいとの中市商店街組合の呼びかけに、かねてから地域の方々と交流を深めたいという思いで活動を続けていた山口大学よさこいサークル「よさこいやっさん!」と山口県立大学よさこい部「奄美連合萩組」の2つの学生団体が企画協力し、よさこい、アカペラ、弾き語り等の学生達のステージパフォーマンスを中心に、ビンゴゲーム、商店街での割引サービスを受けられる学生割引クーポンなど、様々なイベントアトラクションで祭を盛り上げました。第1回結人祭を終え、「よさこいやっさん!」代表の下川仁志さん(教育学部2年)は、「1回のイベントを成功させることよりも、結人祭をきっかけに繋がった関係を継続し、深めていくことが大切。現在、第2回結人祭の準備を進めているが、企画部分を担当するというよりは、商店街と共同して企画を作り上げていくという意識が生まれてきた」と、次回への意気込みを語ってくれました。第2回結人祭は12月14日(土)開催を予定しています。

結人祭の詳細はここでCHECK! >> <http://www.yamaguchi-machinaka.com/information/events/2013/0820164314.html>

## YU-PRSSとは?

ユープラス

広報誌「YU-INFORMATION」や、  
山大のWEBサイト内の「キャンパス  
ライフ」ページなどの制作に携わる、  
山口大学広報学生スタッフです。

YU-PRSS(\*Yamaguchi University Public  
Relations Student Staff)の略)、「山大学生のあなた  
(YOU)にも、そうでないあなた(YOU)にもプラスになる  
情報を届けたい」との想いを込めてつけられました。  
現在20名のメンバーで広報活動を行っています。



### YU-PRSSメンバー

入江 貴博	中富 真奈	小形 晋樹
長岡 奈緒子	城村 ひとみ	中山 拳太郎
前田 梨乃	長岡 真大	原田 海沙
吉岡 優一	倉増 沙和	浅沼 萌
河島 あかね	田里 翔太	横山 侑里
溝口 明音	原殿 花織	近藤 守
石井 沙希	武田 一志	

感想、取材依頼など、YU-PRSSに  
お気軽にメールしてください!

今月号についての感想や、今後こういった特集はどう  
だろうといったアイデア、こんな人を取材してほしい  
といったご要望も受け付けています。また、「私たちが  
取材してほしい」といったサークルやグループも大歓迎  
です。たくさんのメールをお待ちしています。

E-MAIL: campus@yamaguchi-u.ac.jp

「キャンパスライフ」はコチラをCHECK! >>  
[http://ds22.cc.yamaguchi-u.ac.jp/  
~campus/campus\\_life%20\\_web/](http://ds22.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~campus/campus_life%20_web/)

## 01 てくてくツアー秋の特別企画 ～ぼくもわたしも一日大学生～を開催



2013年10月12日に、山口大学吉田キャンパ  
スにて「てくてくツアー秋の特別企画」が行われ  
ました。参加者が4つのコースの中から自  
分の好きなコースを選び、そのコースを学生  
スタッフの方が案内してくれます。秋の特別  
企画ということで、普段はなかなか見ること  
のできない附属農場の見学ができました。  
ツアー中は、スタッフの方が面白く・わかりや  
すく説明してくれるので参加者の皆さんも  
最後まで楽しそうでした。

山口大学のことをもっと地域の皆さんや  
学生に知ってもらいたい、という思いから始  
まったこのツアーは、新たなコミュニケーション  
の場となっています。

## 02 体育会主催の 体育祭を開催

9月28日(土)に山口大学吉田キャンパスのサッカー場にて、  
体育会主催の体育祭が開催されました。あいにくの悪天候  
の中、参加者たちは雨にも負けず全力で楽しんでいました。

プログラムは、参加者全員の堂々とした行進による選手入  
場から始まり、かごが走って逃げるという一風変わった玉入  
れや、身体を張った障害物競走など面白い競技が行われ、  
女性限定の棒引きでは、男勝りな女性の姿が多数見られま  
した。予選と決勝に分けて行われたリレーでは、チームの  
絆が勝敗を分け、椅子取りゲームや stocking 決定戦で  
は、リレーとは違い笑顔で和気あいあいと競技をしている  
姿が見られました。最後に、男子と女子仲良くフォークダン  
スをして、体育祭の幕を閉じました。



## 03 「全国大学サイト・ユーザビリティ調査 2013/2014」で国立大第3位!

日経BPコンサルティングによる「全国大学サイト・ユーザビリティ調査 2013/2014」において、  
全国国公立大学合わせて211校の調査対象うち、山口大学のWebページが、国立『第3位』  
に、総合順位では『第5位』にランキングされました。この調査は、大学サイトのユーザビリティ  
(使い勝手)を、トップページが使いやすいか、受験生を中心に大学サイトの中で必要な情報  
が取得しやすいか、視覚障害者など誰でも使うことができるサイトになっているかなど、様々  
な観点評価するものです。詳細は、日経BPコンサルティングのWebページをご覧ください。  
<http://www.nikkeibpm.co.jp/chosa/web/uschosa/index.shtml>

## YU-INFORMATION

ワイユーインフォメーション  
山口大学広報誌 Vol.116

山口大学総務部広報課

〒753-8511 山口県山口市吉田1677-1  
TEL:083-933-5007 FAX:083-933-5013  
E-MAIL: sh011@yamaguchi-u.ac.jp  
URL: <http://www.yamaguchi-u.ac.jp/>

今月の  
NEWS &  
TOPICS

04 理工学研究科(理) 川口俊宏 助教が2013年度  
(第8回)素粒子奨学会「中村誠太郎賞」を受賞

理工学研究科(理)の川口俊宏 助教はブラックホールへ周辺のガスが大量に落ち込むことで質量が急増加する巨大ブラックホール形成機構に着目し、ガスが大量に降り積もる時に特有の放射特性(明るさや波長毎の強度分布)を理論的に計算し、観測データとの比較によって、現在急成長中のブラックホールが存在することを発見しました。この研究成果に対して、2013年度(第8回)素粒子奨学会「中村誠太郎賞」が授与されることが決定しました。

05 理工学研究科(理) 新沼浩太郎 助教および  
杉山孝一郎 学術研究員がAsia-Pacific Radio Science  
Conference, YOUNG SCIENTIST AWARDを受賞



理工学研究科(理)新沼浩太郎 助教は、山口大学が運用する口径32mの電波望遠鏡を用いて、VLBIという観測方法によってガンマ線を出す正体不明の天体群を観測し、それらの大部分が遠方の銀河の中心に存在する巨大なブラックホールであることを明らかにしました。この研究は「VLBI Observation of Fermi/LAT Un-associated Gamma-ray Sources」と題して発表され、その内容が評価されて若手研究員賞が授与されました。

杉山学術研究員を含む国際研究チームは、このガス円盤の運動を、VLBIという手法で観測し、実際にガス円盤が回転していることを明らかにしました。この成果は「JVN/EAVN Monitor Project for the 6.7 GHz Methanol Masers」として発表され、若手研究員賞が授与されました。

06 医学系研究科 崎本先生が日本動物心理学会  
第73回大会で優秀発表奨励賞を受賞!

山口大学大学院医学系研究科システム神経科学分野(第二生理)の崎本裕也先生が「ラット海馬θ活動の減少と刺激弁別課題の関係」で平成25年度日本動物心理学会第73回大会において優秀発表奨励賞を受賞しました。受賞式は、9月14日(金)~9月16日(月)に筑波大学筑波キャンパスで行われた平成25年度(第73回)日本動物心理学会大会において行われ、賞状および副賞が贈呈されました。



07 東アジア研究科 横田伸子教授が  
「第19回社会政策学会奨励賞」を受賞

本学東アジア研究科の横田伸子教授が、第19回社会政策学会奨励賞を受賞し、平成25年5月25日(土)に開催された、2013年度社会政策学会総会において、表彰されました。この賞は、今後の研究の一層の発展が期待される会員に与えられるもので、このたび対象となったのは、平成24年10月に出版された、横田伸子著『韓国の都市下層と労働者: 労働の非正規化を中心に』です。

EVENTSCHEDULE  
「イベントスケジュール」

12 DECEMBER

- 3 推薦入試Ⅰ  
(教育学部・経済学部・理学部・農学部)
- 火 帰国生徒入試  
(教育学部・理学部・医学部・農学部)
- 社会人入試  
(人文学部・医学部)

25 冬季休業  
(~1月7日)

1 JANUARY

18<sup>土</sup>~19<sup>日</sup>  
大学入試センター試験

23 推薦入試Ⅱ  
(人文学部・医学部・工学部・  
共同獣医学部)

Next Issue

次号予告

豊かな命を担う。

この星の「生きとし生けるもの」を支え、  
「豊かな命」を守り育てるための基盤を担う  
農学部・獣医学部の新しい取組みを  
特集します。

編集発行/山口大学広報委員会

村田秀一(理事・副学長 総務企画担当) / 坪郷英彦(人文学部) / 菊屋吉生(教育学部) / 平中貴一(経済学部) / 川村喜一郎(理学部) / 大和田祐二(医学部) / 山本節夫(工学部) / 竹松葉子(農学部) / 度会雅久(共同獣医学部) / 向山尚志(技術経営研究科) / 何皖毅(大学教育機構) / 平井信義(大学研究推進機構) / 小河原加久治(大学情報機構) / 片山信一(総務部広報課)

企画・編集・撮影・デザイン/株式会社 無限

「志」つなぎ伝える  
二百年



2  
0  
1  
5  
年  
に  
山  
口  
大  
学  
は  
創  
基  
2  
0  
0  
周  
年  
を  
迎  
え  
ま  
す

山口大学は、長州藩士・上田鳳陽により創設された「山口講堂」をルーツとし、明治・大正期の学制を経て、1949年に地域における高等教育および学問研究の中核たる新制大学として創設されました。来る2015年(平成27年)には創基200周年を迎えます。山口大学は、地域に根ざした大学として、さらなる充実と飛躍を期し、次なる100年をより有意義なものにするための記念事業を計画しています。

2013年度

創基200周年NEWS

山口大学では、200年の歴史を多くの皆様に伝えるための講演会、シンポジウム、また、地域のニーズに合わせた様々な行事、学生の企画によるイベント等の各種記念事業などを実施します。ここでは、それら創基200周年に関連した最新ニュースを紹介していきます。



## 創基200周年記念 共育ワークショップ2013 『みんなで山大の教育(共育)について語ろう!』を開催



9月24日(火)、共育ワークショップ2013『みんなで山大の教育(共育)について語ろう!』が教員・職員・学生約80名を集め、吉田地区で開催されました。冒頭、丸本 卓哉 学長より開会挨拶、糸長 雅弘 大学教育センター長より趣旨説明がありました。初開催の本企画には、山口大学憲章が謳う教員・職員・学生による「共育」の場づくり、「廣中レポート」(2000年6月公表、廣中 平祐 元学長が座長)が示す学生中心の大学づくりへの布石という目的がありました。

当日は、「今、求められる人材像」をテーマに、教員・職員・学生の属性別及び教員・職員・学生混合でのグループワークが行われ、林 透 大学教育センター准教授の進行による全体発表では、「自分の考えをしっかりと持った人材」や「新しい価値を創造できる人材」などの多数の意見があり、会場は熱気に包まれました。最後に、額 厚 副学長より閉会挨拶があり、本学の教育・学習に新たな契機を与える機会となりました。



## Back to the Past バック・トゥ・ザ・パスト

山口大学の過去と現在の姿を比較しながら、200年の歴史を振り返ります。



第4回

### 【昭和31年】 県立医科大学附属病院



昭和31年、宇部市の真締川沿いに建つ県立医科大学附属病院の様子。建替え増築が進み、当時の建物は在りません。現在は外来診療棟がその場所に配置されています。手前に見える真締川は平成11年の台風18号による高潮で氾濫したため、護岸の整備や川幅の拡幅が施され当時とは少し様子が変わっています。

創基200周年の詳細はここでCHECK! >> <http://www.yamaguchi200.jp/>